

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12264

研究課題名(和文)慢性呼吸器疾患患者のアドバンスケアプランニングを実現する看護支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of nursing support program for advance care planning for patients with chronic respiratory diseases

研究代表者

樋野 恵子 (HINO, Keiko)

順天堂大学・医療看護学部・准教授

研究者番号：30550892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はACP実践を実現する看護支援プログラムの開発を目的とした。わが国において慢性呼吸器疾患患者のエンド・オブ・ライフに関する研究の蓄積は十分とはいえず、患者のQOL向上への支援方法を確立することが急務であるとの示唆を文献検討から得た。また、終末期医療の質の向上を目指した国家政策が充実している英国でのインタビューを通しACP実践における現状と課題が明らかとなった。ACPに関する認知度の向上を目指し、国際学会での発表や国内学会でのシンポジウムにおける講演、書籍の執筆において本研究の成果を発信した。社会情勢により研究計画が一部変更となったが、ACP推進に繋ぐことができたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慢性疾患を持つ人の余命期間を推定することは困難であり、これまでエンド・オブ・ライフにおけるQOLの低下が課題とされてきた。

本研究の学術的・社会的意義は、わが国での普及が期待されるACPに着目し、慢性呼吸器疾患患者に特化した看護支援プログラムの開発に取り組んだ点である。本研究の成果はACPの認知度を高め、また、呼吸器疾患のみならず慢性疾患患者のエンド・オブ・ライフにおけるQOLの向上に繋がるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a nursing support program that realizes ACP practice.

In Japan, the accumulation of research on the end-of-life of patients with chronic respiratory diseases is not sufficient, and a review of the literature suggests that there is an urgent need to establish support methods for improving the QOL of patients. In addition, through interviews in the United Kingdom, where national policies aimed at improving the quality of end-of-life care are substantial, the current situation and issues in ACP practice became clear. Aiming to raise awareness of ACP, we disseminated the results of this research through presentations at international conferences, lectures at symposiums at domestic conferences, and writing of books. Although the research plan was partially changed due to the social situation, we believe that we were able to promote the ACP.

研究分野：臨床看護学

キーワード：慢性呼吸器疾患 アドバンス・ケア・プランニング 看護支援 エンド・オブ・ライフ QOL

1. 研究開始当初の背景

慢性呼吸器疾患を持つということは、生涯を病いとともに生きることを意味する。必要な治療を受け、適切なセルフケアを実践しながら生活してきた慢性呼吸器疾患患者は、増悪と寛解を繰り返しながら徐々に健康レベルが低下し、感染症の罹患等を契機に急激に致命的な状況へ陥ることが多い。慢性呼吸器疾患患者の余命期間を推定することは、がん患者との比較において難しいとされる。そのため、患者・家族のみならず医療従事者までも回復への期待を持ち続け、人生の質 (quality of life : QOL) からは目を逸らし、残された時間を有意義に過ごす機会を逃してしまう。

病状の急激な変化が予測される慢性呼吸器疾患患者のエンド・オブ・ライフにおいて QOL を向上するためには、日常のコミュニケーションを通して患者のこれまでの人生を知り、この先病いとともにどのように生きていきたいと考えているかを捉え、その実現のために今をどう生きるかを、患者・家族と医療従事者とで一緒に考えることが重要であり、最期までその人らしく生きていけるよう支援することが求められる。

平成 19 年、厚生労働省は「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」を策定した。人生の最終段階における医療は、医療従事者から適切な情報の提供と説明がなされたうえで、患者が医療従事者と話し合いを行い、患者本人による決定を基本として進めることが重要であるとしている。しかし、平成 24 年度に行われた意識調査によって医療従事者に十分認知されていないことが明らかとなり、リーフレットの配布やモデル事業の実施等により、現在普及啓発が図られている。

慢性呼吸器疾患患者におけるエンド・オブ・ライフケアを実践するうえで効果的と考えられるアプローチ方法の 1 つに、アドバンス・ケア・プランニング (advance care planning : ACP) がある。ACP とは、将来の意思決定能力の低下に備えて、今後の治療・療養について患者・家族とあらかじめ話し合う全体的なプロセスであり、話し合いの内容としては、患者の現在の気付きや不安、患者の価値観や目標、現在の病状や今後の見通し、治療や療養に関する選択肢について考えることとされる。ACP は従来行われていた事前指示 (advance directive : AD) から発展し、1990 年代ごろに米国で提唱された考え方である。

以降、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア等の欧米諸国で、地域中核病院等の小規模な取り組みからスタートし、諸国の文化を反映しながら国家全体における浸透へと発展している。日本では最近になり注目されはじめ、国立長寿医療研究センターでの実践例等が報告されている。国の内外を問わず、ACP の実践では、終末期ではなく早い段階からのコミュニケーションのプロセスを重視しており、患者の価値観や希望を大切な家族や信頼できる医療従事者と共有し、相互理解することの大切さを強調している。しかし、ACP 実践には課題もある。患者との話し合いの時期の見極めが困難であることや、患者の希望に沿った医療やケアを提供できないのではないかと懸念等、医療従事者のためらいがうかがえる。

日本での ACP に関する先行研究としては、地域連携や在宅・福祉分野、高齢者看護分野、慢性病全般等で着手されているが、まだ研究過程にあり、現時点では研究成果を統合した論文としては公表されていない。また、慢性呼吸器疾患患者に焦点を当てた看護支援プログラム構築に向けた研究は見当たらない。そこで、本研究はわが国における慢性呼吸器疾患患者に特化した ACP 実現のための看護支援プログラムを開発することを目的とする。看護職者にとって ACP への支援が特別なことではなく、通常の看護援助の一部として取り入れるようになることで、すべての慢性呼吸器疾患を持つ人が最期まで自分らしく生きる手助けが可能となると考える。

2. 研究の目的

慢性疾患を持つ人の余命期間を推定することは困難であり、これまでエンド・オブ・ライフにおける QOL の低下が課題とされてきた。欧米諸国で定着している ACP 実践は、患者のエンド・オブ・ライフの QOL 向上に効果的であるとされる。本研究は、わが国における慢性呼吸器疾患患者に特化した ACP 実現のための看護支援プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

慢性呼吸器疾患患者における ACP を実現する看護支援プログラムを開発するために、ACP・慢性呼吸器疾患看護に関する国内外の文献検討と情報収集を行う。ACP の概念分析を実施し、その結果を踏まえて患者・看護師へのインタビューガイドを作成する。欧米において聞き取り調査を行い、ACP 実践における現状と課題を明確にし、ACP 実践の具体的方法を検討する。これらの結果を踏まえて看護支援プログラムを作成する。以上の研究成果を公表する。

4. 研究成果

研究計画の初段階として、2017 年度は ACP・慢性呼吸器疾患看護に関する国内外の文献検討を行い、研究の動向を把握した。その研究結果の一部を第 5 回世界看護科学学会において発表した。わが国において、慢性呼吸器疾患患者のエンド・オブ・ライフに関する研究の蓄積は十分と

はいえ、これらの論文を統合した看護プログラムを開発し、患者の QOL 向上への支援方法を確立することが急務であるとの示唆を得ることができた。

2018 年度は、終末期ケア戦略やゴールド・スタンダード・フレームワークなど、終末期医療の質の向上を目指した国家政策が充実している英国を訪問し、ACP 実践における現状と課題についての情報収集を実施した。今回訪問したのは、イングランド中心部に位置する国立大学であった。そこで、緩和ケア施設の見学、終末期医療研究者とのディスカッション、看護実践者へのインタビューを行った。ACP 実践における現状と課題について、以下のような語りがあった。英国では治療の選択肢が少ないため、意思決定に迷うことは少ない。呼吸器系や循環器系の慢性疾患患者は、綿密な ACP を嫌がる傾向があり、実際には自宅と病院どちらで亡くなるかを決めることが中心となっている。慢性疾患の終末期は予測不能であり、いつ ACP を進めていくかが困難である。すべての患者が緩和ケアのニーズを持っているが、看護師は病状の早い段階で会話を進めていくことに不安を感じている。ACP のメリットは、ツールがあることで切り出しにくい話題に触れる機会を得ることができることである。デメリットは、すべての患者に ACP が実施されていても、業務のひとつとしての情報収集に終わってしまう場合があることである。一人ひとりの看護師が熟練したコミュニケーターであることが重要である。そのために、専門的な看護師教育が必要となっている。以上のように、ACP の取り組みが進んでいる英国における現状と課題を知ることができた。

2019 年度は、前年度に実施した英国における終末期医療の研究者とのディスカッションと看護実践者へのインタビュー、文献調査等で得た知見を分析し、第 29 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会でのシンポジウムにおいて、「セルフマネジメント支援とアドバンス・ケア・プランニング (ACP)」について発表する機会をいただいた。シンポジウムの中では、臨床において終末期医療に携わる参加者と有意義な意見交換ができ、研究遂行へのヒントを得ることができた。

2020 年度は、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会他より 2021 年度刊行予定の『呼吸器疾患患者のセルフマネジメント支援マニュアル』において、エンド・オブ・ライフに関するアドバンス・ケア・プランニングについて、過去 3 年間の研究成果を集約して原稿を執筆した。ACP は慢性呼吸器疾患患者におけるエンド・オブ・ライフケアを実践する上で、効果的と考えられるアプローチ方法のひとつである。国の内外を問わず、ACP 実践では終末期だけでなく疾病早期の段階からのコミュニケーションプロセスを重視しており、患者の価値観や希望を、患者が大切に思う人々や信頼できる医療・ケア従事者と共有し、相互理解することが重要であるとされている。しかし、研究を進めるにつれ ACP 実践にはいくつかの課題があることが明らかとなった。まず、アプローチを開始する適切な時期の選定が難しいということである。実際には在宅酸素療法の導入や急性増悪による入院など、治療の転換期に支援を開始することが多いが、本来は対象者が健康な時もしくは病状が安定している時から少しずつアプローチを開始していくことが望ましいと考えられるため、その具体的な検討が今後の課題となる。また、社会的な通念が個人の意思決定に影響するため、日本とは社会的・文化的背景の異なる欧米方式の ACP をそのまま導入することは難しいことがわかった。意思決定の過程において、周囲への気遣いにより患者が本心を伝えられなかったり、家族等の意向を優先したりすることもある日本ならではの意思決定支援について、さらに深く検討していく必要があると考えた。

2021 年度は AMED 長寿・障害総合研究事業長寿科学研究開発事業「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」より発行された「アドバンス・ケア・プランニング支援ガイド在宅療養の場で呼吸不全を有する患者さんに対応するために」の外部委員を担当した。

最終年度となる 2022 年度は、これまでの研究成果を踏まえ、論文や書籍にまとめ発信した。「アドバンス・ケア・プランニング」の章を担当し、呼吸器疾患患者のエンド・オブ・ライフの特徴や患者を取り巻く状況、ACP の定義、ACP 実施におけるメリット・デメリット、ACP の実際等について執筆した『呼吸器疾患患者のセルフマネジメント支援マニュアル』が発刊された。また、看護学生を対象としたテキストにおいて、「事例による看護過程の展開」部分を担当した。手術療法を受ける壮年期患者の看護について、術前・術後急性期・術後回復期の病期ごとに、ACP の視点を取り入れながら具体的な看護実践の内容を記述した。

社会情勢により計画を一部変更したうえでの研究活動であったが、本研究期間中においても ACP に関する認知度は非常に高まり、現在では重要なテーマのひとつとして挙げられるようになった。今後も引き続き慢性呼吸器疾患を持つ患者の QOL 向上を目指し、研究活動を推進する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 樋野 恵子	4. 巻 32
2. 論文標題 アドバンス・ケア・プランニング	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本呼吸ケアリハビリテーション学会誌特別増刊号 呼吸器疾患患者のセルフマネジメント支援マニュアル	6. 最初と最後の頁 177-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 樋野 恵子
2. 発表標題 シンポジウム1 呼吸器疾患患者のセルフマネジメント支援マニュアル2019 セルフマネジメント支援とACP（アドバンス・ケア・プランニング）
3. 学会等名 第29回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keiko Hino, Kiyoko Aoki, Mayumi Takaya, Kumiko Uzawa
2. 発表標題 Research trends concerning end-of-life care for patients with COPD in Japan
3. 学会等名 International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 樋野 恵子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 メヂカルフレンド社	5. 総ページ数 496
3. 書名 新体系看護学全書成人看護学 呼吸器第5版 第4章 手術療法を受けた壮年期肺がん患者の看護	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青木 きよ子 (AOKI Kiyoko) (50212361)	順天堂大学・大学院医療看護学研究科・名誉教授 (32620)	
研究分担者	高谷 真由美 (TAKAYA Mayumi) (30269378)	順天堂大学・医療看護学部・先任准教授 (32620)	
研究分担者	鶴澤 久美子(桑江久美子) (UZAWA Kumiko) (50635167)	順天堂大学・医療看護学部・助教 (32620)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	熱田 了 (ATSUTA Ryo)		
研究協力者	関屋 博子 (SEKIYA Hiroko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------